

上杉捨彦先生のご逝去を悼む

早川 征一郎



1998年8月23日（日）午後3時56分、上杉捨彦先生が肝硬変で亡くなられた。享年80歳であった。

上杉先生と最後にお会いしたのは、昨年すなわち1997年5月23日、故・宇佐美誠次郎先生を偲ぶ会（神田・一ツ橋の学士会館）においてであった（なお、4月25日に急逝された宇佐美先生の追悼文については、本誌1997年6月号を参照されたい）。

上杉先生は退職後、なにかと病気がちで、近所のほかは、あまり外出しないと伺っていたが、この時ばかりは、長年の親友であった宇佐美先生を偲ぶ会とあって、よほど頑張って出席されたのであろう。「お元気ですか」と声をかけたが、「いや、そうじゃないんだよ」と一言、ご返事があったことを覚えている。

*

上杉先生と大原社会問題研究所との関係は、主には大原社会問題研究所が、まだ法政大学と合併する前の「政経ビル」時代が中心である。もっとも、『日本労働年鑑』の執筆などでは、法政大学と大原社会問題研究所が合併してからも続いている。

大原社会問題研究所への入所は、敗戦の翌年、1946年5月である。大原社会問題研究所の所員としては、戦後最初の採用者であった。採用の理由は、研究所の事業として、さしあたり『日本労働年鑑』を復刊すべく、その準備のためと

いうことであった。

この点、さる8月3日に逝去された舟橋尚道先生の採用と理由は同じであるが、採用自体は上杉先生が先である（なお、舟橋先生の追悼文については、本誌前号、1998年10月号を参照されたい）。

*

大原社会問題研究所は、戦災で柏木の事務所を失い、高野岩三郎宅に仮事務所を置いていた。だが、1946年5月、神田駿河台の政治経済研究所ビルの1室を借りて、そこに新事務所をかまえた。その政経ビル移転とほぼ同時期に採用されたのが、上杉先生であった。1918年7月生まれであるから、当時、まだ27歳の青年であった。先にふれた「政経ビル時代」であり、1946年5月から、1949年8月13日、法政大学との合併により、政経ビルから法政大学内に移転するまでの時期が、先生の研究所での重要な活動の時期でもあった。

この間、上杉先生は、1948年には、法政大学経済学部専任教員となって、社会政策論の講義を担当しつつ、大原社会問題研究所所員を兼ねることになった。1949年には、大原社会問題研究所を退職している。何月かは手元の資料では定かでないが、法政大学と大原社会問題研究所の合併覚書が、1949年7月に結ばれているから、それに前後する時期であろうと推測される。

*

政経ビル時代の上杉先生の研究所での活動は、『日本労働年鑑』の復刊のための諸準備あるいは各種資料の収集や調査研究活動などであった。先生は、研究所の役員ではなかったが、戦後の研究所の最初の所員として、所員たちをとりまとめ、事実上は研究所の大黒柱的存在であったと言っても過言ではない。

『日本労働年鑑』の復刊準備は、実に多大の労力を要した。資料不足の当時、組合などを飛び回って資料を集めることは、研究所の重要な活動であった。また、上杉先生が先鞭をつけて開始された、当時の新聞記事の切り抜きも、『日本労働年鑑』執筆の重要な基礎資料になった。こうして戦後の『日本労働年鑑』の復刊は、第22集、戦後特集版として実現した。

*

上杉先生が、その『日本労働年鑑』に実際に執筆し始めたのは、第23集、1951年版である。主に、第3部であった。第3部とは、「労働政策」であり、「連合国の対日労働政策」、「政府の労働政策」、「経営者の労働政策」の3編に分かれていた。約140頁近い分量である。奥付の日付は大変遅く、1951年1月1日になっていたが、実際の執筆は早く、1949年から50年にまたがっていた。

その後、上杉先生が、『日本労働年鑑』を執

筆されたのは、第30集、1958年版までであった。担当は主に、第3部であった。レッドパージ反対闘争の傍ら、『日本労働年鑑』の執筆も続けられた。

*

上杉先生が、研究所所員時代に書かれたものとしては、1949年3月、『労働資料月報』のシリーズ第2号の『就業規則と職場規律』がある。

わずか116頁の小冊子であるが、職場規律の保持を目的とした就業規則の役割を労働諸条件全般にわたり、批判的に分析した好著である。

その後では、私が学生時代に読み、いまでも覚えているのは、『国際労働法史』（日本評論新社、1952年）である。ILOについての歴史的理論的考察であるが、先進資本主義諸国の競争条件の均等化要求を基礎に置いたILO分析として、当時、新鮮な印象を受けた。

*

その他、上杉先生の社会政策論の講義ぶりなど、思いだすことは多い。だが、もう上杉先生にお会いし、お話しする機会はなくなってしまった。いまは、心からご冥福をお祈りするばかりである。

（はやかわ・せいいちろう 法政大学大原社会問題
研究所教授・所長）

〔付記〕なお、「政経ビル時代」の上杉先生や大原社会問題研究所および上杉先生と『日本労働年鑑』の関係を知るのに、一層、役立つものとして、法政大学大原社研編『資料室報』1974年1月号（第200号）の「特集：戦後の大原社会問題研究所と日本労働年鑑」（座談会）および『大原社会問題研究所雑誌』1989年2・3月合併号（第363号・364号）の「特集：大原社会問題研究所の歴史と現状」のうち、「座談会：政経ビル時代の思い出」がある。そのどちらの座談会にも、上杉先生が出席し、お話ししておられる。それらを参照していただければ、なお幸いである。